

# 保育士養成課程における実習指導が学生に及ぼす 効果について

## ～帰校日指導の意義と役割について～

Effects of Practical Guidance on Students in Nursery Teacher Training Courses  
～ About the significance and role of back-to-school guidance ～

木村 秀、小澤 由理

Masaru KIMURA, Yuri OZAWA

### 1. 問題と目的

社会福祉士養成課程の実習においては、帰校日指導が実施されている。帰校日指導とは、実習期間中に学生を養成校に集め、実習先から切り離された環境において、実習に関する不安や目標、実践について振り返る場である。実習巡回の場面と異なり、学生同士が自らの実習について振り返り、それを他の学生と共有し、他の学生からもフィードバックをもらうなど、グループスーパービジョンやピアスーパービジョンの機会にもなっている。先行研究では、社会福祉士養成における相談援助実習において、帰校日指導を実施し、学生の自己覚知を促す効果や、実習目標を再確認すること、実習へのモチベーションを高める効果などが報告されている。<sup>1), 2), 3), 4)</sup>

しかし保育士養成課程における実習指導では帰校日指導という形態が知られていないためか、帰校日指導はほとんど実施されていない。従来、本学の保育士養成課程における実習指導では、事前事後指導の授業のほかに、巡回担当の教員が事前面談、巡回指導、事後面談を通じて、個別に学生のスーパービジョンによる実習指導を行ってきた。実習期間中の指導としては巡回指導のみ実施されている<sup>注1)</sup>。巡回指導は、担当教員が実習先へ巡回し、実習先職員と実習内容に関する調整や、学生の実習における態度

や姿勢等について情報交換し、学生を指導する目的で実施されている。担当教員は、学生に対して実習の状況を確認することや体調管理などについて把握し、学生の心身の状況を確認するという重要な役割を担っている。しかし、社会福祉士養成校の教員が実習教育スーパービジョンとして巡回指導について講習会を通じて学ぶことが必須とされているのに対し、現状の保育者養成校の教員においては、巡回の目的や役割について学ぶことが必須とされていない。そのため、巡回指導における巡回担当教員のスーパービジョンの内容にばらつきがあり、学生の学びに寄与する内容のスーパービジョンが必ずしも実施されていないことを学生を通じて耳にすることもある。また、実習期間中に学生同士の学びや不安を共有する機会が設けられていないため、実習期間中に学生個人が友人と連絡を取り合い、実習での経験や悩みを共有しあうなどの非公式な形でピアスーパービジョンを行っている現状もあるようである。

そこで2023年度の実習指導（保育実習3）においては、実習期間中の実習指導の質を高めるために従来の指導に加えて帰校日指導を実施し、学生同士の学びを重視したグループスーパービジョンやピアスーパービジョンの機会を提供した。

本研究は今年度の帰校日指導を受けた学生たちに、どのような教育効果が見られたのかを明

らかにすることを目的としている。具体的には帰校日指導の前後において学生の実習への期待や不安にはどのような効果が見られたのかを明らかにし、帰校日指導の教育効果について考察を行うものとする。

## 2. 方法

本研究では、保育実習における帰校日指導の効果を明らかにするために帰校日指導を実施し、帰校日指導を受講した学生を対象に帰校日指導の前後でアンケート調査を行った。

調査対象、調査内容、調査手順、分析方法、倫理的配慮については、以下の通りである。

### (1) 調査対象

対象は、保育実習3を履修する学生(4年生)17名の協力が得られた。保育実習3は、福祉施設で実習を実施する実習指導であり、すでに4回の実習を終えた4年次の履修科目である。なお本科目は3年次の段階において、学生が選択して履修する科目であり、実習先については学生自ら実習先を開拓して依頼をするよう指導を行っている。本科目を履修する学生が保育実習3を選択した理由としては「児童養護施設の子どもたちや職員の方々と実際に関わってみたい」「保育士としての仕事の幅を広げるためにも施設について実際に実習で何うことで学びたかった」などの回答があり、意欲的に施設実習に取り組む姿勢のある学生たちと捉えることができる。

### (2) 調査内容

本調査における質問項目は、次の3点を活用して帰校日指導の効果について検証した。

#### ①実習期待感尺度(7項目)長谷部(2007)<sup>5)</sup>

実習忌避(2項目)、意義(2項目)、出会い(3項目)の3つの下位尺度で構成され、よくあてはまる(5点)～まったくあてはまらない(1点)までの5件法で回答を求めた。

#### ②実習不安尺度(18項目)長谷部(2007)<sup>6)</sup>

「指導(2項目)」、「人間関係(2項目)」、「事前理解(2項目)」、「活動内容(2項目)」の4つの下位尺度で構成されている。それぞれの質問に対し、よくあてはまる(5点)～まったくあてはまらない(1点)までの5件法で回答を求めた。

#### ③帰校日指導に関する質問

帰校日前の自由記述の項目の内容は、保育実習3を選択した理由について回答を求めた。帰校日指導後の質問項目は、高橋(2011)が実施した内容に準じ、帰校日指導に関する設問についての感想を選択肢で回答するものと自由記述で回答を求めた。<sup>7)</sup>内容は、以下の通りである。

1) 帰校日指導を受けている自分に対する評価「良かった」「普通」「悪かった」の3択で回答を求めた。

2) 帰校日指導を受けている自分に対する自己評価の理由を教えてください。(自由記述)

#### 3) 帰校日指導の効果

「良かった」「普通」「悪かった」の3択で回答を求めた。

4) 帰校日指導の効果に対する理由を教えてください。(自由記述)

5) もし帰校日指導がなかった場合、実習への取り組みはどう変わっていましたか?(自由記述)

### (3) 調査手順

①実習前の授業後にアンケート調査を実施。研究の意義、目的を説明し、協力を依頼。実習期待感尺度、実習不安尺度、保育実習3を選択した理由について回答を求めた。

②実習期間中に帰校日指導を実施。帰校日指導は、通常、養成校に学生を集めて実施されるが、実習期間や実習先の場所などの距離的な関係上、ZOOMを活用し、オンラインで実施した。帰校日指導の内容は、事後学習で実施されるグループスーパービジョンと同じ内容とし、「利用児・者とのかわりからの学び」「施設職員からの学び」「記録を書くことからの学び」

「他学生の実習の話聞き、感じた事や学んだ事」などをテーマに自由にディスカッションを行った。

③帰校日指導後にアンケート調査を実施。実習期待感尺度、実習不安尺度、帰校日指導を受けている自分に対する評価、帰校日指導を受けている自分に対する自己評価の理由、帰校日指導の効果、帰校日指導の効果に対する理由、もし帰校日指導がなかった場合、実習への取り組みはどう変わっていたかについて回答を求めた。

#### (4) 分析方法

実習期待感尺度と実習不安尺度については、 $t$ 検定を用いて、帰校日指導の前後において差があるかどうかを分析する。自由記述の項目については、テキストマイニングを用いて分析する。

#### (5) 倫理的配慮

対象者に対して研究への参加は自由意思に基づくものであること、研究協力への拒否者に対して不利益な取り扱いがないことを説明し、説明文書も配布した上で参加の同意を得た。アンケートの実施にあたっては、個々の研究対象者を特定できないよう無記名で実施し、個人情報保護に配慮した。

本研究は、共立女子大学・共立女子短期大学研究倫理審査委員会の承認を得て、実施されたものである（承認番号 KWU-IRBA#23012）。

### 3. 結果

帰校日指導の前後にアンケート調査を行い、得られた調査結果は、次に示す通りである。

#### ①実習期待感尺度

帰校日指導の前後において、 $t$ 検定を実施したところ、尺度全体及び下位尺度においても有意差は見られなかった。

#### ②実習不安感尺度

$t$ 検定の結果、実習前の授業後よりも帰校日指導後の方が実習に関する不安が低くなる有意傾向が見られた。 $(t(34) = 2.12, p = .0503)$

下位尺度においては、 $t$ 検定の結果、実習前の授業後より帰校日指導後の方が指導に関する不安が1%水準で有意に低くなった。 $(t(34) = 3.18, p = .0058)$

事前理解、人間関係、活動内容の下位尺度では、帰校日指導の前後において有意差は見られなかった。

#### ③帰校日指導に関する質問

帰校日指導を受けている自分に対する評価（質問事項1）、2）についての回答は、「普通」5名、「良かった」12名という結果であった。

「普通」と回答した理由としては、「他の学生へのフィードバックがうまくできなかった」ことや、「自分の話をするのは良かったのですが、日誌を書きたいと思う自分もいたので、人の話を真面目に聞いたほうが良かったと思ったから」という回答があった。これらの回答の背景には、帰校日指導に臨む態度や、学生自身がうまく話をできなかったという不全感を抱えているために帰校日指導を受けている自分への評価を「普通」と回答したのではと考えられる。

「良かった」と回答した理由としては、「他の実習生の困っていることや体験していることを熱心に聞けたから」、「自分の中の悩みや苦しい部分を言葉にして伝えられたから」、「真剣に友人たちの話を聞き、積極的に発言できたから」、「実習内容を振り返り、自分が大変だと思っていることを確認できたため」、「自分の経験を元に、他の人の悩みなどを自分はこうしてみたアドバイスができた」、「実習先で頑張ることや大変なことを学生同士で話すことで、自身の課題などについて再確認することができたこと」、「他の学生の話聞いて、参考になる関わり方や活動内容を聞くことができたのは、安心に繋

がった」などの回答があった。これらの回答からは他の学生の話積極的に傾聴する姿勢が伺えた。また概ね自身のことを肯定的に前向きに捉え、学生同士の相互作用に言及する回答が得られた。

帰校日指導の効果について(質問事項3)、4))の回答は、「普通」が1名、「良かった」が16名という結果であった。「普通」と回答した理由としては、「話を聞いてもらったことから、今自分が何に不安を抱いているのかがはっきりしたこと」、「今の自分を周りの人が褒めてくれることで自己肯定感が上がり頑張ろうと思えました」という回答であった。帰校日指導の効果としては「普通」という回答であったが、理由を見ると帰校日指導の効果を感じられる内容であったと考えられる。

「良かった」と回答した理由としては、「同じ悩みを抱えている仲間がいることがわかってスッキリしたこと」、「実習が苦しいと感じているが、今まで一緒に頑張ってきた友達や先生方に励ましてもらって少し気が楽になったから」という回答や、「初めは正直乗り気ではありませんでしたが、友人たちとの大変なことの共有、先生方からアドバイスをいただいたおかげで前向きな気持ちを取り戻すことができたから」という回答があった。実習の大変さを共有できたり、他の学生や教員からの励ましなどが、実習へのモチベーションを高める結果となったと推測される。また、「自分の困っていることを共有しアドバイスや意見を貰うことでよりよい実習になると思う」という回答や、「他の人も頑張っていること、苦労しながら模索していることを改めて感じられて、孤独感が無くなったから」という回答があり、実習中に学生自身が具体的にどのように行動できたら良いかを振り返る機会となったことも実習への不安を下げることに繋がったのではと考えられる。次に、「他の人の施設の話聞くことで自分の行っている施設の理解を深めることができたこと」、「同じ実習種ならではの楽しさや大変さを共有

したり、違う施設でも同じような悩みを抱えていることがわかったこと」や、「不安な部分を少し解消することができた」という回答があった。実習先に関する施設についての情報を共有することで、実習先施設への理解が深まったり、利用児者への対応法を教え合うことで、実習への不安が低減していくことを学生自身が感じているようであった。

#### ④帰校日指導の有無による変化

もし帰校日指導がなかった場合、実習への取り組みはどう変わっていましたか?という設問への回答としては、以下のような回答があった。

「1人でずっと悩みながら実習を進めていたと思う。(実習への取り組みは)変わらないか、気持ちが下がっていたと思います。」、「1人で最後まで苦しい気持ちを抱えて実習していたと思う。」、「憂鬱な出来事もあったので、それを発散出来ることなく気持ちの切り替えが上手いかないまま実習を続けてたと思います。」、「実習の折り返しでの帰校日指導だったため、なかったらメリハリがつけられなくなると思った。」、「実習は緊張もありストレスも溜まるのでモヤモヤしたまま実習を終えると思う。」などの回答があった。

これらの回答は、帰校日指導がなかった場合に実習における不安を解消できずに抱え続けていたことを推測する内容であり、実習期間中に実習における不安な気持ちを吐き出せる場が求められていると考えられる。

このほかに「取り組みは今まで通りと変わらないと思うけれど、今後の実習に対するモチベーションが上がった。」「実習に対するネガティブな悩みが無かったため大きく変わることはないと思うが、帰校日指導があったために他の人の話を聞くことが出来てプラスになった」という回答や、「誰と同じ施設であるかを知ることができたため、相談をしやすくなることにもつながると感じた」という回答も得られた。帰校



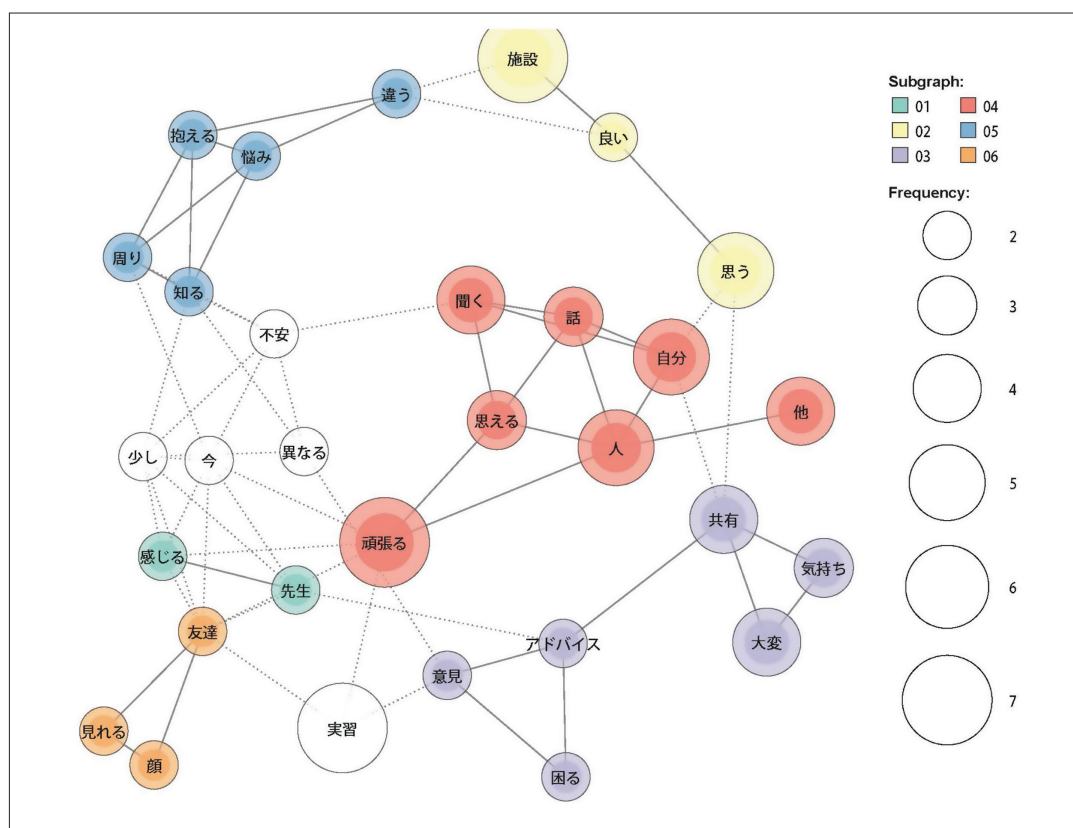


図1 帰校日指導の効果に対する理由における共起ネットワーク

日指導があることで、実習に関する情報を共有できることや、他の学生に相談しやすくなる効果があったことを考えると、学生自身が実習について広く情報を共有できる場を求めていることが推測される。

### ⑤テキストマイニング

自由記述で回答が得られた帰校日指導の効果に対する理由と、もし帰校日指導がなかった場合、実習への取り組みはどう変わっていたかという設問について、それぞれテキストマイニングを実施し、質的なデータ分析を行った。

#### 1) 帰校日指導の効果に対する理由

図1は、帰校日指導の効果に対する理由における共起ネットワークを示したものである。こ

の図には、「気持ち」「大変」「共有」の言葉のつながりからはスーパービジョンにおける支持的機能が、「意見」「アドバイス」「困る」の「共有」の言葉のつながりからからは教育的機能などが読み取ることができ、これらの機能の効果を帰校日指導を通じて学生が感じられていたと推測される。

「悩み」「抱える」「知る」「周り」などの言葉のつながりからは、学生同士が抱えている悩みを知ったり、仲間で共有できたことが効果があったということも読み取ることができる。この効果は自由記述にも「悩みを抱える仲間がいることがわかってスッキリした」という回答からも推測できる。

また、「自分」「人」「話」「聞く」「思え

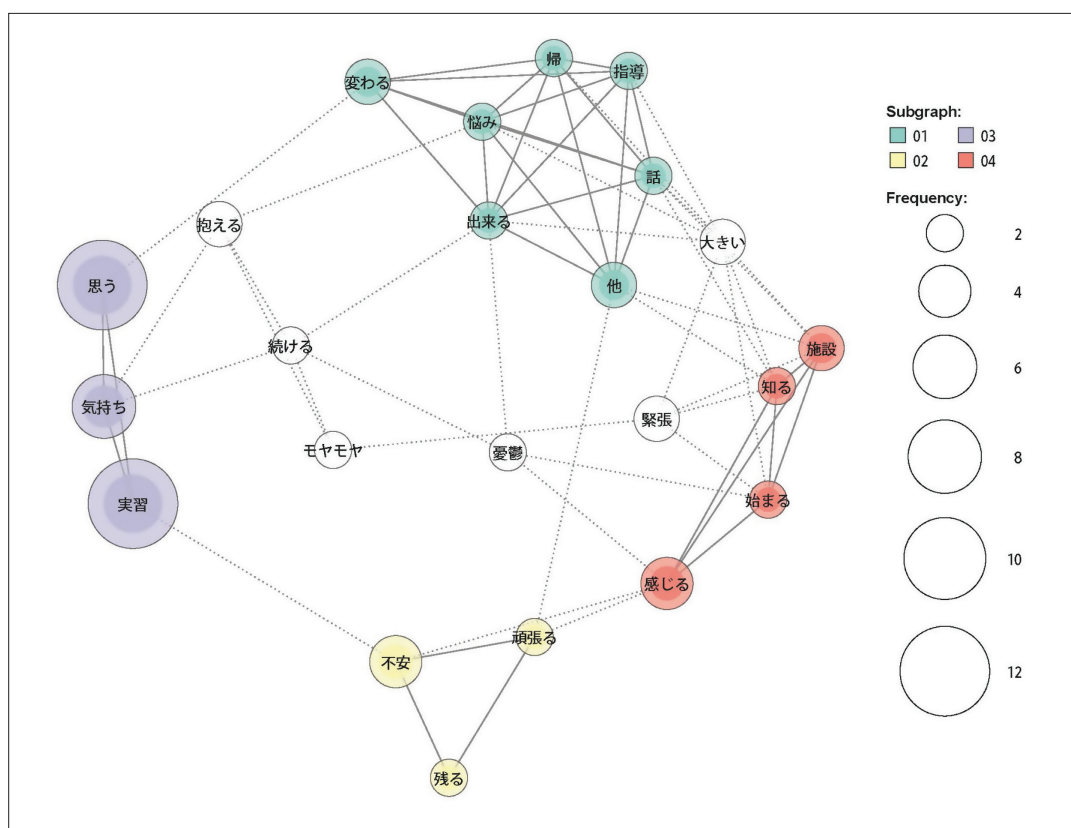


図2 帰校日指導がなかった場合、実習への取り組みはどう変わっていたかにおける共起ネットワーク

る」、「頑張る」の言葉のつながりからは、帰校日指導において自分が話をしたり、他の人の話を聞くことで、頑張ろうという気持ちになった人が多くいたことが考えられる。帰校日指導の最も大きな効果として、学生が実習を頑張ろうという気持ちになれたことがあげられるのではないだろうか。

2) もし帰校日指導がなかった場合、実習への取り組みはどう変わっていたか

図2は、帰校日指導がなかった場合に実習への取り組みはどう変わっていたかにおける共起ネットワークを示したものである。

「モヤモヤ」、「憂鬱」、「緊張」、「続ける」、「抱える」、「大きい」の言葉が繋がっていることから、もし帰校日指導がなかったら、モヤモヤした気持ちや憂鬱な気持ちを抱え続けたり、

緊張した状態が続いていくことを学生は感じていたと考えられる。自由記述においても、「困っていることにモヤモヤをずっと抱えながら嫌な気持ちで実習を続けていたと思う」という回答や、「もっと憂鬱なまま始まり、更に毎日辛いと思ったように感じる」という回答があることから、帰校日指導があることで、憂鬱や不安な気持ちを和らげることができたと考えられる。

また「不安」、「残る」、「頑張る」も近い距離でつながっていることから、帰校日指導を通じて学生自身の頑張りや他の学生が頑張っていることを共有しなかったら、不安な気持ちを解消することができずに実習を継続することになったかもしれない、という推測が反映されていると考えられる。

#### 4. 考察

上記の調査結果を踏まえ、今回の帰校日指導の効果について2つの効果が読み取れた。第一に実習への不安や期待に対する帰校日の効果、第二にグループスーパービジョンとしての帰校日の効果について考察していく。

##### ①実習への不安や期待に対する帰校日の効果

事前指導と帰校日指導後の間において、実習期待感尺度では差が見られなかったが、実習不安感尺度では、帰校日指導後の不安が減少する結果となった。特に下位尺度の「指導」においては、有意差が見られたことから、実習における日々の活動にどのように取り組んだらよいかについて、学生同士で困っていること、不安に思っていること、頑張っていることなどを共有できたことが不安を低減する効果があったと推測される。高橋（2013）も、帰校日指導の効果として、学生同士の情報交換、課題や悩みの共有をすることが効果的であると報告している。<sup>8)</sup>

このように帰校日指導において、学生同士の学び合いが展開されたことや、苦勞、大変さに共感してもらった体験などは、スーパービジョンにおける支持的機能や教育的機能が行われていたと考えられる。結果として、実習への不安を低減することや実習へのモチベーションを高めることに繋がったと考えられる。

##### ②グループスーパービジョンとしての帰校日の効果

本研究における帰校日指導は、対面ではなくオンラインで実施された。高橋（2013）は、対面における帰校日指導の実施について、時間や経済負担が大きいと感じる学生がいることを報告している。<sup>9)</sup> 対面とオンラインにおけるコミュニケーションについての差が生じることも考えられたが、学生自身がオンラインでのディスカッションの経験を積んでいることで、移動時間や場所の制約を受けない形式の帰校日指導

は、指導に参加するハードルを下げる要因となったと考えられる。

指導においては、学生は各ブレイクアウトルームに入り、学生同士で自立的にスーパービジョンを行い、教員は各ブレイクアウトルームを見回る程度の監督を行った。教員の介在が最小限となったことで、学生自身が努力していることや、実習でうまくいかなかったこと、嫌だなどということを語りやすくなり、さらに学生同士が活発に話ができることで、帰校日指導に対して「良かった」と多くの学生が回答することにつながったと考えられる。すなわち、ピアスーパービジョンの効果は大きかったと推測される。

学生の親しい友人同士の間だけでは、愚痴を言い合うだけになってしまったり、実習に関して深く考えることをしない単なるおしゃべりとなってしまうことがある。しかし、帰校日指導という場を設定したことで、学生がお互いにスーパーバイザーとスーパーバイジーという両方の役割を担ったことから、スーパービジョンとしての質が高まり、自己覚知を促す機会としても効果的であったと推測される。

#### 5. まとめ

巡回指導も帰校日指導もどちらも実習期間中にスーパービジョンが展開されるが、その内容は大きく異なる可能性が考えられる。巡回指導では、教員と学生という関係性のため、教育的機能の割合が増えることがいえる。また、学生の実習状況によっては、巡回教員による管理的機能のスーパービジョンが求められることもある。さらに巡回担当教員が学生に対して行うスーパービジョンには、実習先施設に関する経験や知識を始めとする力量について教員間による差もあることから、スーパービジョンの機能の内容と質は一様ではない。

一方の帰校日指導では、グループスーパービジョンやピアスーパービジョンがメインとなる。施設内で実施される巡回指導と異なり、帰

校日指導は実習先施設の場を離れて実習を振り返り、学生自身の気持ちや実習に関する情報、知識を共有する場を提供する。学生間の相互作用によって効果に差があると考えられるが、実習先にいる緊張感から開放されることで、不安や悩みを開放しやすくなることや、学生同士という同じ立場で励まし合ったり、苦労を共有できることの効果は大きい。この結果、実習への前向きな気持ちを取り戻したり、明日からの実習を頑張ろうという気持ちにつながる考えられる。今までの巡回指導のみの関わりでは、教員と学生という縦関係の中でしか、実習を振り返ることができなかったが、帰校日指導を行うことで、学生同士という横のつながりで実習を振り返ることで、学びが広がったと考えられる。

以上、本研究では帰校日指導が、学生の実習への不安を低減する効果があること、グループスーパービジョンやピアスーパービジョンを通じた学生間による深い学ぶことができることや、スーパービジョンにおける支持的機能、教育的機能の効果が高まることが示唆された。保育実習では2週間未満の短い実習期間であるため、帰校日指導の実施のタイミングを設定することの難しさはあるが、保育実習においても帰校日指導による学生への教育効果を検討する必要があると考えられる。

なお本調査対象の学生の実習先には社会福祉士養成の実習指導を行う施設もあり、スーパービジョンの知識や技術に基づいた実習指導を行っている施設が多い。保育実習3を履修した学生は、実習期間中そのような実習先の指導方針で指導を受けながら、本学における帰校日指導を受けることができた。本研究では、実習期間中にスーパービジョンの視点に基づく実習指導を受けた効果も明らかにできた可能性があるだろう。

## 6. 課題

今後は帰校日指導で得られた効果について

は、一連の実習指導の流れの中で実習終了後の事後指導を含めて検証していくことも求められよう。

また、本研究の対象者は17名と少数であったことから、今後は母集団が大きくなった場合でも今回の帰校日指導で得られた結果と同様の効果があるかどうかを検証する必要がある。

今回、実施した帰校日指導は、大学生活において5回目の実習に取り組む学生を対象としたが、多くの実習経験を積んだ学生であっても実習期間中は、不安を抱えながら実習へ取り組んでいることも伺われた。そのような学生の心境を踏まえ、養成校の教員による帰校日指導、巡回指導、そして日々の実習における施設職員がともに学生に対するスーパービジョンの質を高めていくことが重要だろう。

## 脚注

1) 保育実習中の巡回指導については一般社団法人全国保育士養成協議会が定めた『指定保育士養成施設の指定及び運営の基準』(平成30年改正)「第3 実習施設の選定等」には「5. 保育実習期間中に養成校の教員は、少なくとも1回以上実習施設を訪問して学生を指導すること。」と定められている。

## 引用文献

- 1) 矢野明宏, 森佳奈枝, 中村宏 (2019) 「社会福祉実習の帰校日指導に関する一考察— A 大学社会福祉実習演習関係授業の実践から—」『武蔵野大学人間科学研究年報』第8巻 95-104
- 2) 山口倫子 (2015) 「相談援助実習帰校日におけるピア・スーパービジョンに関する一考察」『福祉臨床学科紀要』神戸親和女子大学福祉臨床学科 編 第12号 55-60
- 3) 井上牧子, 西澤利朗 (2014) 「精神保健福祉援助実習における帰校日を活用したスーパービジョンの試みに関する考察」『目白大学総合科学研究』第10号 125-138



- 4) 高橋昌子 (2011) 「新カリキュラムでの相談援助実習への取り組み―帰校日指導の効果を通して―」『神戸親和女子大学教育研究センター紀要』第7号 41-48
- 5) 長谷部比呂美 (2007) 「保育実習に関する学生の意識について ―実習不安を中心として―」『淑徳短期大学研究紀要』第46号 81-96
- 6) 上記5)
- 7) 高橋昌子 (2013) 「相談援助実習での帰校日指導の効果」『福祉臨床学科紀要』第10巻 75-80
- 8) 上記7)
- 9) 上記7)